

次の文章は、建春門院に仕えた、藤原俊成の娘、健御前たけみけによる女房日記「たまきはる」より、門院崩御の前後を記した一節である。これを読んであとの問いに答えなさい。

六月廿六日の夕つ方、あからさまに参りて、折節※1なき事思ひ立つよし申す。それも人々のはからひなれば。この程の事どもに、おはしまし所も変はりて、東の台盤所※3と言ひし方へ参りたれば、やがて御声も聞こゆ。「このほどは、御修法どもに、局もみなふたがりてなければ。まことに疾くひる蒜い召して、よくなりたらんに、疾く疾く参らせ給へよ。」と仰せらるる御声も、ただ例の同じ事なれば、物はかなき心に、何事かはとうち思ひて、出でぬ。明くる日よりその事始めて、暑くわびしけれど、文は日ごとに参らす。

七月七日、堪えがたく暑きに、この事も果てにしむつかしさに、髪洗ふほどに、いかにしたりしにか、心地限りなく損なひて、絶え入りなど言ふばかり、人々も騒ぎたりしつとめて、あるかなきかの心地するに、日ごろ、「ただおなじ御事」とのみありつる冷泉殿の返事に、「早くにておはしませば、申すはかりなし。」とばかりあるを見る心地は何にかは似たらん。なべの世、たれかは思ひ嘆かぬ人あらん。されど、うち向かひたる人々も、わが思ふばかり、たれかはあらん。置き所なき心地ぞする。

九日ぞ、人々出だし立てしかば、泣く泣く参りたれば、あやにくに音する人もなく、静かなり。近く候ひける人は、日ごろにいたく困じにければ、うち臥し休むにや、ただおのがどち、忍びやかにうち群れゐたれど、物言ふ声もせず。まして、つましう恥づかしければ晴る方もなくて出でぬ。折節なきその匂ひなど失ひてぞ、物忌みのころ、しばし候ひし。先々は、もとあるを取り捨てて、小さきを植ゑられし萩、女郎花、わがままに所得て、縁の上まで咲きこぼれたる盛りさへ恨めし。

露消ゆる憂き世にあきの女郎花ことしも知らぬ色ぞ悲しき
それより、女郎花のうとましきこそあいなけれ。

- ※1 折節なき事……………都合の悪い事。ここでは蒜（んにくの類）を服する養生を指す。作者自身も体調がすぐれなかった。蒜の養生は臭気があるので七日間は人に会うべからずと言われた。
- ※2 この程の事ども……………建春門院が病氣になった事を指す。
- ※3 東の台盤所……………ここに女院が病臥し、御修法の道場も設けられたと考えられる。
- ※4 その事……………作者の蒜の養生。
- ※5 つとめて……………翌朝。七月八日の朝。
- ※6 冷泉殿……………女院の同腹の姉君で、女院の側近くに仕える女房。
- ※7 早くにておはしませば……………御危篤でいらつしやるので。
- ※8 日ごろに……………連日のご看病で。
- ※9 晴る方もなくて……………慰むすべもないまま。女院のご病床やご臨終の様子を聞き出すこともできないまま。

問一 点線部A、Cのここでの語意として最も適当なものをそれぞれ次のア、オから選び、記号で答えよ。

A	オエウイア	づいぢよつと ずうぢうしく はつきりと ひかえめに ていねいに
B	オエウイア	不自由さ 不便さ 不快さ 不自然さ 不運さ
C	オエウイア	自分ひとり いつのまにか ばらばらに たまたま 仲間どうし

問二 二重傍線部a、dの「に」の文法的説明として適当なものを、それぞれ次のア、オの中から選び、記号で答えよ。

- エア 格助詞「に」 断定の助動詞「なり」の連用形 オイ 接続助詞「に」 完了の助動詞「ぬ」の連用形 ウ 形容動詞連用形の語尾

問三 波線部ア、エの敬語のうち、敬意の対象が一つだけ異なるものを選び、記号で答えよ。

問四 傍線部①「何事かはとうち思ひて」とは、何について、どう思ったのか。そのように思った根拠を明らかにして、四十字以内で説明せよ。

問五 傍線部②「あるかなきかの心地する」とはどのような状態か。最も適当なものを次のア、オの中から選び、記号で答えよ。

- オウア いるかないかわからないほど静かだ。いてもたってもいられないほど心配だ。何が何だかわからないほど呆然とする。 エイ 生きた心地がしないほど気分が悪い。身も世もなく泣き崩れるほど悲しい。

問六 傍線部③・⑤を口語訳しなさい。

問七 傍線部④「わが思ふばかり、たれかはあらん」の解釈として最も適当なものを次のア、オの中から選び、記号で答えよ。

- オエウイア 自分以外の誰よりも一番悲しい思いをしている 自分が予想したほどは人が集まっていなかった 自分だけが思いこんで誰の賛同をも得られない 自分が考えても他の人の本心まではわからない 自分が心配するほど他の人は気落ちしていない

問八 傍線部⑥「それより、女郎花のうとましきこそあいなけれ」とは、どんな心理か。最も適当なものを次のア、オの中から選び、記号で答えよ。

- オエウイア 女院の崩御に立ち会うことのできなかった自分を責めるかのように咲く女郎花を、恨めしく思う心理 周囲の女房たちから避けられている自分と、ひっそりと咲く女郎花を重ね合わせ、親近感を持つ心理 世の無常を感じ出家しようとしている自分の俗世への未練が、女郎花の美しさにかき立てられる心理 女院の死を嘆き悲しむ自分の気持ちも知らずに咲き誇っていた女郎花に、後々まで不快感を抱く心理 前々からなぜか気に入らなかつた前栽の女郎花にさえ、女院の崩御の寂しさから、愛着を感じる心理

問七	問六		問四		問三	問一
	⑤	③				A
問八					B	
						C
					問二	
					a	
						b
			問五		c	
						d

古文
【標準解答】

問一	A	ア	B	ウ	C	オ	各3点
問二	a	オ	b	エ	c	イ	各2点
問三	イ				d	ウ	2点
問四	女院のご病氣について、お声もいつもと変わりないので、何の心配もいらな い と思った。						6点
問五	イ						5点
問六	③	すべてこの世の中で、嘆き悲しまない人がいるだろうか、いや、 <u>いない</u> 。					5点
	⑤	たいへん疲れてしまったので、横になり休んでいるのだろうか、					5点
問七	ア						5点
問八	エ						5点

合計50点

【解説】

《出典》『たまきはる』：十一世紀初めに成立した女房日記で、作者は藤原俊成の娘健御前たけこぜん。作者は十二歳の年、後白河上皇の寵愛を受け高倉天皇を生んだ建春門院に仕え、門院崩御のちしばらくして、後白河院の異母妹八条院のもとに出仕し、さらに八条院猶子の春華門院の養育の任にもあたった。女房名を中納言といったので、この日記は別名『建春門院中納言の日記』とも。内容は女あるじのたしなみや、御所の気風、女房の躰や心得など、テーマ別に思い出を語り伝えるようにまとめられており、若い女房の参考に供しようとする意図があったと推察できる。本文は門院崩御の前後の作者の思いが綴られており、女院への敬愛と思慕、女院の死に対する深い悲しみに溢れた、いかにも女房日記らしい一節である。(本文は岩波書店「新日本古典文学大系」によった。)

《口語訳》

六月二十六日の夕方、ついちよつと参上して、都合の悪いこと(蒜の養生)をしようと思ひ立つた旨を(女院に)申し上げる。その蒜の養生も家人の計らいなので(従うほかない)。この度の女院のご病氣のため、いらつしやる場所も変わつて、東の台盤所と言つていたところに参上したところ、すぐに御声も聞こえた。「この度は、御修法などのために、局もみなふさがつていてないので(仕方がないですね)。本当に、早く蒜を召し上がつて、良くなつたならば、早く早く参上なさいませよ。」とおつしやる御声も、ただいつもと同じ様子なので、浅はかな考えで、ご病氣は何の心配もいらな**い**と思つて、退出した。あくる日からその蒜の養生を始めて、暑くてやりきれないが、手紙は毎日差し上げる。

七月七日、耐え難く暑く、また蒜の養生も終わつて不快なので、髪を洗つているうちに、どうしたのだろうか、気分がこの上なく悪くなつて、死にそうだと言うほどで、家人も騒いでいたその翌朝、生きた心地もしない状態だったところへ、この数日、「ただいつもと変わらない様子です。」とだけ書いてあつた冷泉殿の返事に、この日は「ご危篤であるので、なんと申し上げてよいかわからない。」とだけ書いてあるのを見る氣持ちは、何にもたえようがない。すべてこの世の中で、思ひ嘆かない人がいるだろうか、いや、い**ない**。しかし、顔を合わせる家人たちも、私が嘆くほどに嘆いている人がいるだろうか、いや、私ほど悲しんでいるものは誰もいない。身の置き所のない氣持ちがする。

九日、家人が私の出仕を許したので、泣きながら出仕したところ、あいにく訪れる人もなく、静かである。女院のおそば近くにお仕えしていた人は、連日のご看病でひどく疲れてしまつたので横になつて休んでいるのだろうか、ただ、仲間どうし、ひっそりと集まつて座っているけれど、何かものを言う声もしない。まして、(私は蒜の養生の後で)人前に出るの**は**はばかられ氣がひけるので、(女院のご病床やご臨終のご様子を聞きだして)慰むすべもないまま、退出した。蒜の養生の臭いなどが消えてから、四十九日の中陰のころに、しばらく出仕した。以前には、もと生えていたのを取り捨てて、小さいのをお植えになつた萩や女郎花が、今年は生え放題に延び広がつて、咲きこぼれているその花の盛りまでが恨めしい。

女院の崩御にあつて憂き世がいやになっている私なのに、秋の女郎花は何も知らぬ顔に美しい色に咲いている、それが悲しい。

そのときから女郎花をいとおしく思うようになってしまつたのも、こまつたことだ。

《設問と解答について》

問一 いずれも覚えておくべき単語である。**A**「あからさまなり」は多くは連用形で副詞的に用いられ、①突然に、急に②ちよつとの間。ほんのかゝりにそめに。③明白に。ありのままに。④仮に。その場のぎに。といった意味を持つ。**B**「むつかし」は①うつとうしい。不快である。②わずらわしい。面倒である。③氣味が悪い。恐ろしい。などの意味を持つ形容詞。本文の前後から、臭氣のある蒜養生を済ませた作者の不快さを示す。**C**「おのがどち」は、「どち」が「同士」に通じることをおさえて覚えること。「自分たちの仲間同士」の意。

問二 **a**は直後が過去の助動詞「き」。完了と過去の組み合わせのパターンである。**b**は、挿入句で「ゝにか、」となつているので、「ゝにかあらむ(ゝであろうか)」の「あらむ」が省略された形であることに氣付こう。**c**は、「ゝところ、」の意味で単純接続の接続助詞。**d**は形容動詞「忍びやかなり」の連用形の活用語尾。

問三 作者が女院の御前に参上する場面であるので、ほとんどの敬語は女院に対する敬意を表すためのもの。その中で、**イ**だけが、女院の会話文中にあり、「蒜を服用する」という作者の行動に尊敬語を用いた表現になつてい**る**。身分の差を超えて、相手に対して敬意を払う敬語表現であることに注意。

問四 傍線部①の直前「物はかなき心に」に注目。この後、女院のご病氣が悪化し、死に目にも会えなくなるとは予想も出来なかつたことを、後から悔やむ作者の氣持ちが表れている。「ご病氣はたいしたことはない」と判断した根拠は、さらにその前の「：仰せらるる御声も、ただ例の同じ事なれば」である。

問五 「絶え入りなど言ふばかり」に注目し、筆者が氣分が悪く死にそうだと言つてい**る**ことから判断できる。

問六 ③「なべて」(おしなべて・すべて)の語意と、反語の訳し方に注意。⑤「困ず」の語意、「ゝにや」の後の「あらむ」の省略に注意。

問七 皆が嘆き悲しむ中でも、おそば近くにお仕えしながら、崩御の際に立ち会うことの出来なかつた作者の氣持ちである。

問八 「うとまし」(いやな感じだ・いとわしい)、「あいなし」(氣にくわない・おもしろくない)の語意をおさえて、文脈から判断する。